モズク採苗及び養殖管理―2

瀬　底　正　武

1．目　的

品質の高いモズクを安定的に供給するには、品質管理以前の養殖管理技術の習得が不可欠である。

養殖2年目の今帰仁漁協モズク養殖生産部会員に対し、指導を行った。

2．対　象

養殖生産グループ

3．指導内容

1）低温採苗と芽落ちの関係

①採苗水温が15℃以下、特に1、2月の一番寒い時期には10度以下になる場合がある。低水温では胞子の放出が極端に少なくなる。十分に種付けが出来ない状態で網を沖出しすることになる。

②そのような網は、芽出しが悪く雑藻がのりやすい。一般的にいわれているバラツキ網である。

③したがって、出来るだけ種付けは保温した状態（ハウスをかぶせて17、18℃以上）で採苗し、網一面にまんべんなく付ける。雑藻ものりにくくなる。

④網一面にまんべんなく付けるためには、タンクに網を入れ過ぎないことである。

⑤網を2段、3段と積み重ねる者もいるが、バラツキの大きな原因でもある。
網は1段敷きで、すき間を開ける等余裕のある採苗が望まれる。

2）芽落ちの起こりやすい漁場、雑藻がのりやすい漁場の管理

①地域によっては、毎年多かれ少なかれ、芽落ちが出たり「バリカン症」が出やすい漁場がある。そういった漁場は、そのたび毎に漁場移動を余儀なくされている。

②完璧に採苗しても、漁場条件に合わない場合は、どうしても起こりうることでありそのたび毎に、網を入れ換える作業を繰り返している。

③このような、作りにくい漁場では沖だし時期のタイミングを十分経験しつつ漁場の特性を習得するしかない。

④雑藻ののりやすい漁場も同様に、雑藻がのりにくい時期を日々の網回りを多くこなすことにより、漁場の使い方が分かってくる。

3）沖出し後の網の管理（網回り）は生産を揚げる上で必要不可欠である。

①新規生産者の場合、漁場の特性を知るまでに3、4年の年月は覚悟しなくてはならない。一年でも早く漁場の特性を知るには、毎日の網回り等養殖管理は不可欠である。忘れた頃に網回りをしても生育経過がわからないことでは、漁場の適否の判断がつかなくなり、結局毎年同じ失敗を繰り返すだけで終わってしまう。

②兼業での養殖生産は、力の入れ方が二分されるので不安定な漁場ほど実態を知るまでにはかなり時間を要することになり、生産も不安定となり中途で辞める者も多く見られる。兼業との両立は十分検討する必要がある。